

# イエメン現代史

(ヘジラ暦1322年から1405年)

(西暦1904年から1985年)

イエメンの歴史に関する現代史は、西暦20世紀の始まりと共に始まっており、ヘジラ暦1322年即ち西暦1904年に、呼び掛けを行ったイマーム・ヤヒヤー・ブン・ムハンマド・ブン・ヤヒヤー・ハミード・ディーンの時代の始まりをもって開始される。イマーム・ヤヒヤーの呼び掛け(注1)とは、前述の日付で、彼の父親であるイマーム・マンスール(「神への信頼」と尊称されていた)の死亡後に行なわれた。厳密に言うと、マンスールは同年1322年、イスラーム暦第3月19日木曜日の夜に神に召された。

注1) 「14世紀におけるイエメンのイマーム達」ムハンマド・ブン・ムハンマド・ザッバーラ著 P. 403

上記の事柄は、ハーシド地方のカフラの町で起こったことで、彼の亡骸はハウスの町へと運ばれ、そこで埋葬された。彼は享年71歳近くで、約15年統治を続けた後に亡くなった。ハウスで彼の埋葬式に参列した学者達は、彼の息子である当年35歳のヤヒヤーに対して忠誠を誓った。

当時のトルコの総督はタウフィーク・パシヤであったが、イエメン側とトルコ側との間の度々の直接的、間接的接触にもかかわらず、イマーム・マンスールとの和解協約を結ぶことが出来なかった。

イマーム・マンスールが死んで、その息子のヤヒヤーが王座に就いたが、彼も父親と同じ様に、トルコ人に敵対する道を歩んだ。そこでイエメン内にあるトルコ兵達の駐屯地(例えばアムラーンとかサラールとかハッジャとかその他の地域)の多くで、彼等に対する全面的な戦争を宣告した。カフラ・アズラからハウスへ、更にハマル(そしてそれらの町がイエメン人達の手に落ちた後)、アムラーンへと移って行った。イエメン人達はそこから前進して、更にイエメン全土から約2万人が集結してき、サヌアーを包囲した。既に彼等はイマーム・ヤヒヤーの蜂起のその年に、激しくサヌアーを包囲攻撃していた。この包囲に関しては、歴史家の故アブド・アルワーシウ・アルワーシー教授がその歴史書「イエメン史における悲惨と貧困の調査」(注2)の中でこう述べている。

(注2) 第一版 P. 197

「多くの部族がサヌアーに集まって、一致団結した。そして住民達に対して広範囲にプレッシャーをかけ、包囲攻撃を更に激しくした。そのため子供や老人、女性や箱入り娘達は町の

外へ逃げ出し、残された者達も大変な恐怖に耐えた。そこで財貨や財宝や家具の全てを売り払ったが、買い手が見つからない為に二束三文の値段となった。中には品物を市場へ運ぶ運び屋を雇っても、賃金を払うことの出来ない者もいた。買い手が見つからず、運び屋が（賃金の代わりに）荷物の半分を受け取った。内戦のために飢えがイエメン中に広がり、包囲攻撃によって農民は農業を捨て、イエメンは空っぽになった。つまり多くの村々で人々が飢えて死んだ。ハウラーンでは、人々は馬草を粉にして食べた。サヌアー郊外のカービル村では1600人が死に、それ以外でも、サヌアー周辺の全ての村々で死んだ人がいた。そして南の海岸地帯であるティハーマ地方のサハーム・ワジで道の真只中に51人も死者が発見された。

一方、サヌアーの町の中では、警察権力を笠に着たトルコ人のムフティ（法官）や一部の軍隊の命令で、兵士達が町の商人や有力者、或いは裕福であると見做されている者達の家々に押し入り、オスマーン帝国の軍隊のために彼等の所有する穀物を手に入れた。

サヌアーの包囲は6か月間継続した。そしてその後、トルコ人達はサヌアーを引き渡し、ヒラーズ地方へ撤退している。そしてイマームの軍隊はサヌアーへ入城した、それは双方の合意に基づくものであった。イマームはその合意により、サイフ・アルイスラーム・アハマド・イブン・カーシム・ハミード・アッディーン、彼はトルコ人達からサヌアーを受け取った人物であるが、彼をイマームの代理として選んだ。当時イマームはカウカバンにいた。それからイマームは1905年（ヘジラ暦1323年）4月21日サヌアーへ初めて入城した。その事はイマームに友好的な地域に伝えられた。但しトルコ人達の影響力を残す事を規定したティハーマ、アシール、イップまたヒラーズを含むタイズ地方は除かれていた。そしてこの状態は、合意に対するオスマーン・トルコ政府の信任を待つために数カ月間続いた。」

## アハマド・フィーディーー ヒジュラ暦1323年～1326年

しかしながらイエメンは、前述の西暦1905年6月に、イエメンに関する諸事情に明るいアハマド・フィーディーー指揮のトルコの大軍によって攻撃された。（それは）そこに再び彼の統治を回復する為であった。彼の統治は、イエメンにとって、これが3度目の統治であると考慮されている。彼は、イマーム・マンスールの蜂起の呼び掛けの直後に、サヌアーに対する攻囲を解いた人物だが、それは我々が知っている様に、アハマド・フィーディーーのイエメンに於ける2度目の統治であった。

アハマド・フィーディーーは、ヒラーズ地方に到着した。そこではサヌアーからそこへ撤退し、そこに配置されていたトルコの軍隊が彼に加わった。そして彼は、サヌアーへ向かって前進を続け、極度の困難を伴い、サヌアーの西の近郊であるアスルに到着した。それというのはヒラーズからサヌアーへの途上、彼の配下の諸部族の抗争あった為であった。彼がアスルに到着するが早いか（注3）、イマーム・ヤヒヤーは、トルコ人達がサヌアーにいる彼を

包囲する事を恐れ、サヌアーからハーシド地方へと撤退してしまっていた。

(注3) 「イエメン歴史精選」 アルジュラーフィー著 P. 220

そこでアハマド・フィーディーは、西暦1905年（ヘジラ暦1323年）の9月初旬にサヌアーへ入った。イマーム・ヤヒヤーは、サヌアーからの撤退を、そこに対する掠奪と、トルコの大砲による蹂躪を恐れてのこと、と正当化した。

アハマド・フィーディーは、そこ（イエメン）の諸事情についての経験と、精力的であることを買われて、彼の政府からイエメンへ向かって彼の軍隊を動かす様にと命令が送られた。その折彼は、ナジュドの北方にいて、80歳であった。そこで彼の軍隊はジェッダへと砂漠を横切り、そこから彼は、その軍隊と共に海路ホデイダへ向かった。そこでは我々が知っている様に、そこにいたオスマーン帝国の軍隊が彼の軍隊に加わった。

イマーム・ヤヒヤーのサヌアーからの撤退と、軍隊を伴ってのアハマド・フィーディーの入城ともかかわらず、イマーム・ヤヒヤーは、対トルコ戦を彼のもとにいるイエメン人達の支援を得て、ゲリラ戦の形をとって継続した。最初アハマド・フィーディーは、諸事情の安定化と、イマームの戦闘行為の制圧との為に、近代兵器で装備されている彼の軍隊を伴って、北方への行軍を決定する事を余儀なくされた。その為の準備を彼がしていたその時、イマーム・ヤヒヤーの要塞のあるシャハーラへ進軍し、そこを押さえ、彼を逮捕せよ、とのスルタン・アブドゥルハミードの命令が来た。（注4）

(注4) 「善き賞賛の広がり」 イスマーイル・ブン・ムハンマド・アルウシュラー著 P. 72

そして彼は自分の軍と共にサヌアーを出で北部へ向かった。（注5）イエメンの各部族は本拠地より、続けざまに撤退していった。サヌアーや海岸の諸都市にある食糧基地からトルコ人を遠ざけ、イエメン人だけが知ってる岩だらけのイエメンの高山へ引き込み、それに加えて、遠い距離を横断したり、山に登ったりすることによって、彼等の軍を疲れさせる事が目的だった。実際、彼等の軍は疲れ、疲労と病気が彼等に大打撃を与えた。食糧は使い尽くされ、その供給は止まり、ついに彼等の士気も破壊された。

(注5) 「イエメンのオスマーン統治」 ファールール・オスマーン・アバーザ著 P. 159

総督アハマド・フィーディーは、軍と共に目的を達することなくサヌアーに戻らざるを得なかった。サヌアーに行く途中、イムラーンに着いた時は、軍の多くを失っていた。それにもかかわらず、イエメン人達が彼の不運な旅行中守ってきたサヌアーの包囲を解き、その中に入ることが出来た。その後シバームやクウカバーンやハッジャを征服（注6）することが出来た。トルコの影響力はイムラーンに及んだ。しかしシハーラの町の征服には失敗した。

(注6) 「イエメン歴史精選」 アルジュラーフィー著 P. 220

遠征失敗の理由は、トルコ軍が北部を進軍中に直面した困難（注7）の為であった。そこで彼等は総督に対し反乱を起こし、軍の動揺を招き、再び北部に進むことを困難にした。トルコの兵士達はサヌアーのマシーカ地区の電報・電話局に集まり、そこの人々から掠奪をした。また彼等の一部は2週間の間大モスクを占拠した。彼等は給料の支払いを要求し、イエメンでの軍務の終了を論拠として、トルコへの帰還を要求した。事態はアハマド・フィーディーが反乱者達を送り返さざるを得ない程であった。またオスマーン・トルコ帝国は、結局イマーム・ヤヒヤーとの交渉を新たにやり直さなければならなかった。イエメン人達を満足させ、同時にオスマーン帝国の名誉を保つ合意に到達する為に。

（注7）「イエメン史における悲惨と貧困の調査」 アブド・アルワシー・アルワシー著、第1版P.205

### イマーム・ヤヒヤーが提示した条件

オスマーン・トルコ政府は、ヒジュラ暦1325年にイマーム・ヤヒヤーとの交渉のために、メッカの学者の多くをメンバーとする代表団を送った。イマームはその代表団に、締結が予定されているトルコとの和解決議の原則となるように、彼が望んだ条件を提示した。実際にその条件のいくつかは両国で締結された和解の基準となった。その和解条約は「ダッアーン」条約という名で知られたもので、ヘジラ暦1329年まで批准されなかった。イマーム・ヤヒヤーは次の言葉で条件を締め括った（注8）。

（注8）「イエメン史における悲惨と貧困の調査」 アブド・アルワシー・アルワシー著、第1版P.209

「この条件をイエメン諸地域において実践することは、人類個々の平和と国家の発展・再生を促すものとなるだろう。事象がその最も美しい姿で現れ、そこから多くの良いことが生まれる。ある人々（トルコの指導者達を意味するが）、彼等がイエメンに多くの召集軍隊を送ることで、利益を得ていることは明白である。

即ち、派兵は彼等にとって物質的な利益からの疎遠を意味しないのである。彼等は恐らく、この条件に満足しないであろう。何故ならそれに従うことは状況が安定し、この地方への軍隊の到来が停止することになり、そのことで彼等の望み続けていたものを失うことになるからである。そこで私は上述の条件の受け入れを保障するスルターン承認を依頼するのである。イエメンの民が安心し、その精神が平安であるために。また条件が私に与える支配権の行使と、アーニス地方の様な東部地域の行政機関を私の元に置くことに官吏達が抵抗、妨害しない様に」ヘジラ暦1324年第2月2日、1906年4月4日

トルコ側とイエメン側間に締結が予定された協定に対する基幹として、イマーム・ヤヒーヤが持ち出してきた条件というのは、次の様なものである。（注9）

（注9）「イエメンのオスマーン統治」 ファールルール・オスマーン・アバーザ著 P. 162

1. 司法、行政の統治はイスラームの気品ある聖法シャリーアに従って行われること。
2. シャリーアの法官及び司法権を持った地方知事の罷免及び任命の権利は、イマームに戻すこと。
3. 詐欺及び収賄を行った者達の懲罰はイマームの手に委ねられること。
4. 裁判官と職員に十分な給料を規定すること。これは経済力の乏しさが彼らを収賄に走らせないためである。
5. ワクフ（寄進）はイマームの責任で、諸地方の善行の為に生かされる。
6. ムスリム及びイスラエル人達（原本にこのように記載されている）の中で罪を犯した者に対するイスラーム法の規定は、崇高なるアッラーが命じられ、そして彼の使徒がそれを実行した様になす。即ち、現在イスラーム法の規定は、トルコ人官吏達が何も無かったかの如く、既に無視してしまっているのである。
7. 雨水により灌漑された農地からの収穫の10分の1が徴収される、また井戸水により灌漑された農地からの収穫の20分の1、もしくは40分の1が徴収される。そしてそれ以外の負担金は免除される。
8. 上述の負担金の徴税は、国（オスマーン帝国）の知事の監視下に、地方のシャイフのオフィスを通じて行う。上述の負担金を増やそうと企らむ者は、免職或いは減給とし、その判断はイマームに任せる。またオスマーン帝国の直轄地の収入については、イマームは関知しない。
9. ハーシド、ハウラーン、アルハダア、アルハブの各地方の諸部族は、負担金徴税から免除される。
10. 協定を締結する両者は、逃亡した裏切り者たちを引き渡すこととする。
11. 各地方で恩赦を発表する。過去については問わないこととする。
12. 啓典の民がムスリムを指導しないこと。
13. 上述の条項の決定は、サナー、タイズ、及びその周辺に適用される。
14. 政府（オスマーン国）は、アーニス地方の諸事には介入しない事。またこの裁定に対して、イマームが行う官吏の任命に反対しない。これは住民の貧しさや、収入の少なさのためであり、オスマーン・トルコ政府の官吏による違反で、禁じられている事が起こることを恐れるために、である。
15. 外国の侵犯からこれらの地方を守ることは、高貴なる国家（オスマーン帝国）に委ねられる。

## ハサン・タハシーン総督（ヘジラ暦1326年～1328年）

ハサン・タハシーン総督（注10）は、ヘジラ暦1326年、アハマド・フィーディー総督の後任としてイエメンに赴任した。未だにオスマーン・トルコは、イマーム・ヤヒヤーがイエメンとオスマーン・トルコの両者間の和平協定の基盤として提示した条件に対して何ら返答をしていなかった。またオスマーン・トルコの元においてイマームとの仲裁が成されておらず、イエメンにおける彼の法的な統治権の承認も、オスマーン・トルコには何ら影響を及ぼしてはいなかった。そしてその統治権に関して言えば、外交上の諸事項に対するオスマーン・トルコの保護を彼に対して付与することや、イエメンに対するいかなる外国の勢力による敵対行為からのイエメンの防衛を求めることも含まれていた。そしてこれらは、前述したイマームの提案した条件の最終条項であった。

（注10）「イエメン史における悲惨と貧困の調査」アブド・アルワーシー・アルワーシー著、第2版P. 309

「イエメンのオスマーン統治」 ファールール・オスマーン・アバーザ著 P. 282

オスマーン・トルコによる前述のハサン・タハシーン総督の任命は、前任者のアハマド・フィーディー総督がとった過酷な政策により生じた外傷の単なる鎮痛剤の役割に過ぎなかった。そしてこの出来事はヘジラ暦1325年にスルターンのアブド・アルハミードが、メッカから派遣団を送り込み、臨んだ和平協定の交渉が決裂した後のことであった。その構成員とは、アブドラー・アッパース博士とメッカの学者達の9人の随行員であった。この交渉は、派遣団とイマーム・ヤヒヤーとの書簡交換が数えるほどしか無いものとなった。だが派遣団はイマームに対して事態を安定させるための和平協定へ到達する回答を求めるよう、助言を与えている。一方イマームは、総督の行政府やイエメンにおけるそのトルコ人官吏達の行状の悪さに対して苦言を述べたてていた。また派遣団はイエメンにおけるトルコ人官吏達の策謀についての警告を与え、次のように述べている。「私達は貴方達に官吏達の策謀について警告します。彼らの意図することに従わせるために、貴方がたの様な人達を引きつける為の様々な方法を彼らは持っているのです」（注11）

（注11）「イエメンのオスマーン統治」ファールール・オスマーン・アバーザ著 P. 669  
この注に関しては、歴史家であるアルオカイリーの著書のP. 537に依拠している。

依然としてトルコの官吏達は、イエメンの人々やイマームに対するスルターンの怒りをかき立て続けていた。それは自分達の欲望を実現させるためであり、かつイエメンにおける戦闘を継続することで利益を得るためであった。メッカからの代表がイエメンから出発する際に、スルターンはイエメンにおける事態の真実について、詳細に把握していなかった。これに依り、イエメンで新たな動乱が導きだされることになり、結局アハマド・フィーディーを

罷免し、トルコ政府中枢部で、寛大さとバランスの良さと理性的なことでも有名なハサン・タフシーンを任命することになった。これはイエメンの状況を和らげ、事態を鎮静化し、イエメンの状況を修正することが目的であった。事実アフマド・タフシーンは多くの事柄を実現した。しかし彼は最終的に物事を決定することは出来ず、彼にはその様な委任権も与えられていなかった。人々はアフマド・フィーディーの罷免とハサン・タフシーンの任命を吉兆とみなし、同様にスルタンはイエメンの状況改善のために最大の努力を切望していた。彼は総督とイマームに対して（注12） 決定的な改善のテーマを検討するために、スルタンの元にイエメンの代表を送ることを望んでいたが、それはヘジラ暦1326年のことであった。

（注12）「イエメン史における悲惨と貧困の調査」アブド・アルワシー・アルワシー著、第2版P. 309

カーディー（司法官）であったアブドルラハマーン・ブン・アリー・アルハッダードがこの代表団のメンバーに含まれていた。彼は当時トルコの影響下地域で任命され、タイズ地方の裁判所のカーディーとして、また再審裁判所長として働いていた。彼ただ一人がスルターン・アブドルハミードに謁見した折に、トルコ語で代表団の申立てをした。

イエメンの派遣団はイスタンブールに到着し（注13） 彼らは留め置かれたゲストルームに1か月間滞在した。そしてスルターン・アブドルハミードは、彼らがイエメンへ帰国の途に着く為にトルコを去る前に、10分間のみ謁見した。しかもイエメンの将来に関する彼らとの合意にも到達し得なかった。しかも派遣団自身も統一された目的のための一つの手段についてすら、メンバー間で一致が見られなかった。というのは派遣団は様々な地域から、また様々な目的を持って構成されていたからであった。つまりそのメンバー達は、イマームの影響力の及ぶ地域や、イエメンにおいてトルコ人達が影響力を持つ地域から構成されていたのであった。派遣団は自らの手にあったチャンスを失ってしまった。つまりスルターンは、彼らの意見の差異を認識していたのであった。それと共に、彼らはイエメン問題故にトルコに来ていたのだが、その事に関心を持たずに、ある者達はスルターンのもとにおける自分自身の目的に関心を寄せていた。こうしてスルターンは彼らにイエメンへの帰国を命じた。

（注13）「イエメン史における悲惨と貧困の調査」アブド・アルワシー・アルワシー著、第2版P. 309

イエメン問題の解決に至りたいとする希望により、スルターンのイエメン総督に、イマームを通してのみの派遣団を彼の元に送るように命じた。イマームは自らの手で派遣団を構成した。そのメンバーの中に、団長としてアブドラー・ブン・イブラーヒームがいた。しかしこの派遣団さえも空手形で帰国した。スルターン・アブドルハミードは、彼らを歓待したにもかかわらず彼らと行った話し合いは失敗した。会談の失敗の原因は、オスマーン・トルコの人達が見せた次のような態度であった。即ちイエメンの国境を特別に設定することは、

全てのオスマーン・トルコの諸州の基本的法律を侵害することである、というものであった。その期間中、トルコとのイエメン問題はアラビアやトルコの新聞に目立ってきていた。その中にエジプトで発行されていた「アル・ムアイイド（支援者）」紙（注14）がある。

（注14）「イエメン史における悲惨と貧困の調査」アブド・アルワシー・アルワシー著、第2版P. 309

その中で主幹のアリー・ユーセフ教授は、イマーム・ヤヒヤーに対してオスマーン・トルコとの和平協定締結を呼び掛けている。それに対してイマームは彼に向けた書簡の中で、解決を阻害しているトルコ政府に対して非難の矛先を向けている。そしてイエメンにおけるオスマーン・トルコの総督やその官吏達の行状やその圧政について詳細に述べている。

またヘジラ暦1327年のトルコの新聞「タニーン」紙の通巻の一つ（注15）を前述の新聞は引用している。それはトルコ語からアラビア語に翻訳されたもので、次のように言及している。「イエメン人とは、賢く、逆境に強いということ知られている。また、このような性質を持っている民族は、文明化が早くすすめられ、文明化の理解や改革にも迅速に対応出来る、という傾向を持っている。しかし何よりも先駆けて行わなければならないのは、行動的で有能な官僚の任命である。

そして彼らは全て、オスマーン帝国の組織で知識、経験の豊富な者として任務に就くであろう。さあ、その国家に我々は、能力を有する者達の中から知事と支援者、そして商業、農業や教育の専門的な経験のある指導者を派遣しよう。また、卓越している技師らや真摯な文化人らも彼らに同行させよう。その後、騒乱と流血を我々は収めるであろう。この人材の派遣の繰り返しも悪くない。これには、イエメン人の性質や慣習に適した特別の行政部をイエメンが所有することが唯一の方法であり、それ以外の道はないのである」

（注15）「イエメン史における悲惨と貧困の調査」アブド・アルワシー・アルワシー著、第2版P. 309

## ヒジュラ暦1328年サファル月からジュマダー・アルウーラー月の ムスタファー・カーミル

イエメン総督ハサン・タハシーンの時代、イエメンでは、ヘジラ暦1327年オスマーン・トルコ人達のクーデター（注16）勃発まで、事態は安定化していた。そしてスルターン・アブドルハミードは退位し、彼の兄弟ムハンマド・ラッシャードが、その地位に就いた。クーデターを遂行した「統一と進歩委員会」はタラアトとアンワルとジャマールの指導に拠るもので、国の政策を支配していた。そしてタイズのアラブ州長官として、総督のハサン・タハシーンをムスタファー・カーミルに変えた。しかしそれはヘジラ暦1328年の3ヶ月間だけ



のことであった。

(注16) 「イエメンのオスマーン統治」 ファールール・オスマーン・アバーザ著 P. 173, 174

## ムハンマド・アリー・パシャ ヒジュラ暦1328年～1329年

さて次に「統一と進歩委員会」はムスタファー・カーミルの後任として、ムハンマド・アリー・パシャ（注17）を総督に任じた。この人物により、再びイエメンに強権政策が敷かれる事となった。この強権政策とは彼の政府、即ちトルコに成立した革命政府が、単にイエメン国内にとどまらず、オスマーン帝国領各州政府の行政に対し命じたものであった。

(注17) 「イエメンのオスマーン統治」 ファールール・オスマーン・アバーザ著 P. 173, 174

オスマーン・トルコのクーデター以来イエメンと帝国の間に勃発し、継起していた騒動は、当初、帝国地方行政の不手際と、政府の官僚に対して上がった不満の声だったが、それだけでは済まず、次第にアラブや他の諸州、即ちオスマーン帝国領全土に飛火することになり、ついに破滅的な紛争へと様相を変えていった。更に、イエメンにおけるムハンマド・アリー・パシャ主導の、無能な政策と過酷を強いる政策運営に対し、イエメン各地で次々に新たな暴動と無政府状態と動乱を招き、結局、先述の総督解任という事態に及んだ。

すでにワーシイー教授は彼の歴史書の中（注18）で、ムハンマド・アリー・パシャ総督がイエメンで実施した政治の特徴をこう説明している。

(注18) 「イエメンのオスマーン統治」 ファールール・オスマーン・アバーザ著 P. 240

「彼（ムハンマド・アリー・パシャ総督）の考えだと、イエメンを良くするには力と厳しさ以外ないと思っていた。そこでは例え、（いかなるイエメン人であれ）彼らに国家の権利が与えられ、そして権力者への服従の誓約が成されていようが、理由もなく彼らを投獄したり、殴ったりすることを止めだてされたりはしなかった。また彼は、イマームと関係のある人物を投獄することで、かつて総督アフマド・フィーディー・パシャがした様な振る舞いに戻った。更に例え証拠のない訴えでも、トルコの一部の役人達は喜んでそうしたのだが、彼らと低劣な言い争いをした人物に、その人がイマーム・ヤヒヤーを好いている、という考えを故意に総督に吹き込んだ。そのためその人は連行され、殴られ、投獄された。（トルコ側の）主張は証拠がなく、否、嘘八百なのに信用された。こうした不正や腐敗が増え、イエメンの人々が圧政と抑圧の下にあった時、イマーム・ヤヒヤーは立ちあがった。と同時にイエメンの各拠点の全てにおいて、諸部族も立ち上がった。彼らはイエメンの中心地サヌアーやその他の地区で激しく包囲行動を行った。が、サヌアーにいる総督は相変わらず人々を恐れさせ、彼らに外出を禁じ、厳しく対処した。そして町の門を閉じ、警察官に命じて路地裏を

巡回させた。もし二人連れで人が話をしていたり、一緒に歩いているのを見つけたら、殴って投獄し、また、もし警察官が夜、ランプの明かりが高い場所で輝いている一軒の家を見つけたら、その家の主人を捕らえて殴り、投獄するようにさせた。総督はこう宣言した。彼らこそが、夜、包囲者達に町への攻撃を合図している者である、と。人々は未だに総督への恐怖や恐れが消えなかった。これらの事全てには、人々が包囲や苦難、そして食べ物や必要な全ての物を断たれた状態にあった事は含まれてはいない。そして不正にも、牢屋は囚人達で一杯になった。総督は更に、大胆にもサヌアーの住民のうち50人を死刑に処した。そうした中で、幾人かの役人達、有能な学者であるハリール・アスアド・アフアンディという裁判長代理(法廷の裁判官カーディ)を除いた官吏達が、パシヤを信任するハンコを押した。(ただこの裁判長代理だけが、パシヤの行った)不幸な事態に対して手を貸すことをしなかった。

そして彼はこう言った。「合法的裁定がないまま、たとえ誰一人でも、イスラーム教徒の血が流れたら(もうそれで裁判官としての)私の責任(保護)は満足しないのだ」。

ワーシィー博士の歴史叙述は更に続き、イエメンの諸部族が首都を包囲した際の、冷血漢ムハンマド・アリー総督についての記録活動を述べている。

ムハンマド・アリー総督は、前述の「統一と進歩委員会」の一員であった。この委員会はスルターンのアブドルハミードに対してクーデターを企て、スルターンの弟ムハンマド・ラシャードを新スルターンに擁立した。これによりトルコの統治基盤は固まり、中央集権化とトルコ民族優先主義運動台頭に鑑み、帝国全土の各州政府に在籍していた旧政権下の官吏、知事、高級官僚達を其の俣在籍させていた。従って先に叙述したように、アラブ地域内にある帝国諸州において、アラブ人によるトルコに対する反乱が相次いだが、今回は世論(注19)もこの抵抗運動に加わり、アラブと外国の多数の新聞は、各々の観点から、イエメンそのものが抱える問題点について報道した。

(注19) 「イエメンのオスマーン統治」 ファールール・オスマーン・アバーザ著 P. 245

そしてエジプトの新聞はイエメンの出来事を映し出す鏡であった。またその問題に対する情報においては、非常に重要な役割を為していた。つまりアラブ人一般の、特にイエメン人達の記事や論文に紙面を割いていたのである。またトルコ政府中枢におけるイエメン問題や、トルコの新聞や外国の新聞のそれに関する記事を翻訳し発表した。それはイエメン史研究に携わる学徒や研究者達を支援する歴史的に豊富な記録であった。

## イゼット・パシヤ将軍 ヒジュラ暦1328年～1330年

イエメンでのトルコ総督ムハンマド・アリー・パシヤは強硬で厳しい政策を採り続けた。(注20)

(注20) 「イエメンのオスマーン統治」 ファールール・オスマーン・アバーザ著 P. 252

この事がトルコ支配へのイエメン人達の反乱とイエメンの多くの町に対する包囲を倍増させた。それらの町とは、トルコ人達が存在する中心地の町々であり、その筆頭にあるのがサヌアであった。上記の事がトルコ政府にアブドッラー・バシヤの指揮の下、強力なトルコ軍を送る事になった。それはイエメンの反乱抑圧の為であったが、アブドッラー・バシヤはイエメンへの道中、ヒジャーズで帰らぬ人となった。そこでオスマーン・トルコからはそこでオスマーン・トルコからアハマト・イゼット・バシヤ將軍、彼は前述の攻撃軍を支援する軍団長であったが、彼に命が下された。それと共に彼に罷免権と任命権、必要な改善の措置を行うための委任権が付与された。アハマト・イゼット・バシヤ將軍はオスマーン・トルコの憲法発布以前(注21)にはホダイダの第14師団の中將であった。そして彼にはイエメン人達との信頼関係があった。彼はイエメンに15年間滞在していたのだった。

(注21) 「イエメンのオスマーン統治」 ファールール・オスマーン・アバーザ著 P. 259

そしてオスマーン・トルコの憲法発布後(注22)には全トルコ軍幕僚長となった。エジプトの「ムアアイド」紙は次ぎの様に彼を評している。即ち彼はアルバニアの高貴なる名家の中でも高い位の出自であり、イエメンにおいても政治的経験と公正さそして熟練度と道徳的態度で際立っている、と。

(注22) 「イエメンのオスマーン統治」 ファールール・オスマーン・アバーザ著 P. 259

実を結んだ彼の努力の中には、トルコ人達とイマーム・ヤヒヤーとの和平協定(1911年、ヘジラ暦1329年)に最も大きな影響力を持った事であった。この和平協定は後述する「ダッアーン」合意として知られるものであった。イエメンにおける彼の指揮下の幕僚長であり、前述の和平協定交渉の中心人物となった者に、アスマット・バシヤ(後のトルコ共和国大統領アスマット・エニョ)とアジーズ・アリー・アルミスリーとサリーム・アルジャザーイーがいた。彼ら全ては軍事、行政面に豊かな経験を備え、アジーズ・アリー・アルミスリー自身は和平協定交渉の成功に重要な役割を果たした。